

# 箕輪遺跡

調査第Ⅲ集

昭和 57 年

箕輪町教育委員会

# 箕輪遺跡

調査第III集

昭和 57 年

箕輪町教育委員会

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 樋口彦雄

箕輪遺跡がその姿の一部を現わしたのは、昭和26年伊那土地改良区によって、大規模な耕地整理事業が行なわれたことによる。当時三日町地区在住の小川守人氏と故小池修兵氏によって貴重な資料を採集し保存し、後に箕輪町博物館に展示することができた。これらについては、箕輪遺跡第II集に細部にわたり報告をした。

箕輪遺跡に関する本報告書は第III集であるが、内容については第2次発掘調査の報告である。第I集は国道バイパス工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘のための確認調査の報告であり、第II集は本発掘を初めて試みた結果の報告書である。

第1次調査と同じ丸山敏一郎調査団長、柴登巳夫博物館学芸員を担当者として作業協力者によつて作業を進めることができた。

今回の発掘については草を追つて明確にするが、特筆すべきことは、今までに解明できなかつた、田の形、あぜの状態、かんがい用の水の出入口等の状態を知ることができた。

第1次及び第2次ともに箕輪遺跡全域から見れば、ほんの一部である。今後引き続き県道みすず箕輪線道路改良工事或は其の他の道路改良工事が進められるなら、それに伴う調査によつて広大な箕輪遺跡の全貌を明らかにしたい。

## 凡 例

- 1、本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪11.537番地他に所在する、箕輪遺跡第2次調査の報告書である。
- 2、本調査は、伊那建設事務所の委託を受けて箕輪町教育委員会が実施した。  
発掘調査は昭和57年7月13日より8月6日まで実施し、引き続き整理作業を行なった。  
作業分担は次の通りである。  
土器の整理——福沢幸一　　遺構実測団の整理——五味純一、山内志賀子、福沢幸一、  
竹入洋子、柴登巳夫、泉沢利夫　　出土木製品実測、トレース——五味純一、泉沢利夫  
山内志賀子、小林紀史、竹入洋子　　写真図版——山内志賀子
- 3、本書に掲載した遺構の写真は柴登巳夫が撮影したものを使用した。尚出土木製品の撮影  
は征矢進氏に御協力いただいた。
- 4、出土陶磁器については友野良一氏からご教示いただいた。
- 5、本書の執筆は丸山敏一郎、樋口彦雄、柴登巳夫、竹入洋子が行なった。
- 6、本書の編集は発掘調査団が行なった。
- 7、本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

# 本文目次

題　字		教育長　樋口　彦雄
序		" "
凡　例		" "
本文目次		" "
挿図目次		" "
付表目次		" "
図版目次		" "
第 I 章	遺跡の立地.....	1
第 1 節	位　置.....	1
第 2 節	自然環境.....	2
第 3 節	歴史的環境.....	3
第 II 章	発掘調査の経過.....	6
第 1 節	発掘調査に至るまで.....	6
第 2 節	調査の概要.....	6
第 3 節	発掘調査日誌.....	9
第 III 章	遺構と遺物.....	15
第 1 節	遺　構.....	15
(1)	第 1 調査区.....	15
(2)	第 2 調査区.....	19
(3)	F—61、62グリッド出土木櫛列について.....	20
第 2 節	遺　物.....	26
(1)	木櫛杭.....	26
(2)	出土木製品.....	27
第 3 節	出土陶磁器.....	28
第 IV 章	ま　と　め.....	29

## 挿 図 目 次

- 第1図 筒輪遺跡周辺の地形と既出遺物出土地点
- 第2図 位置図
- 第3図 遺跡周辺の地形
- 第4図 周辺遺跡分布図
- 第5図 第II次調査全体図
- 第6図 第1調査区出土木柵列実測図
- 第7図 第1調査区A～D地点木柵出土状況実測図
- 第8図 第2調査区出土木柵列実測図
- 第9図 第2調査区A～C地点木柵出土状況実測図
- 第10図 第2調査区F-61、62グリッド出土木柵列実測図
- 第11図 第1調査区出土木柵実測図
- 第12図 第2調査区出土木柵実測図 No-1
- 第13図 " No-2
- 第14図 " No-3
- 第15図 " No-4
- 第16図 出土木製品実測図
- 第17図 出土陶磁器実測図

## 図 版 目 次

- |      |               |      |
|------|---------------|------|
| 図版 1 | 調査区近景         |      |
| 図版 2 | 調査区全景         |      |
| 図版 3 | 遺構状況 No—1     |      |
| 図版 4 | 〃             | No—2 |
| 図版 5 | 〃             | No—3 |
| 図版 6 | 木柵杭打込み状況 No—1 |      |
| 図版 7 | 〃             | No—2 |
| 図版 8 | 〃             | No—3 |
| 図版 9 | 遺物出土状況 No—1   |      |
| 図版10 | 〃             | No—2 |
| 図版11 | 〃             | No—3 |
| 図版12 | 〃             | No—4 |
| 図版13 | 調査風景 No—1     |      |
| 図版14 | 〃             | No—2 |
| 図版15 | 〃             | No—3 |
| 図版16 | 整理作業状況        |      |
| 図版17 | 調査参加者スナップ     |      |
| 図版18 | 出土木柵杭 No—1    |      |
| 図版19 | 〃             | No—2 |
| 図版20 | 出土木製品         |      |
| 図版21 | 出土陶器 No—1     |      |
| 図版22 | 〃             | No—2 |
| 図版23 | 〃             | No—3 |
| 図版24 | 〃             | No—4 |
| 図版25 | 〃             | No—5 |
| 図版26 | 出土桃の実         |      |
| 図版27 | 出土桃の実とくるみ     |      |

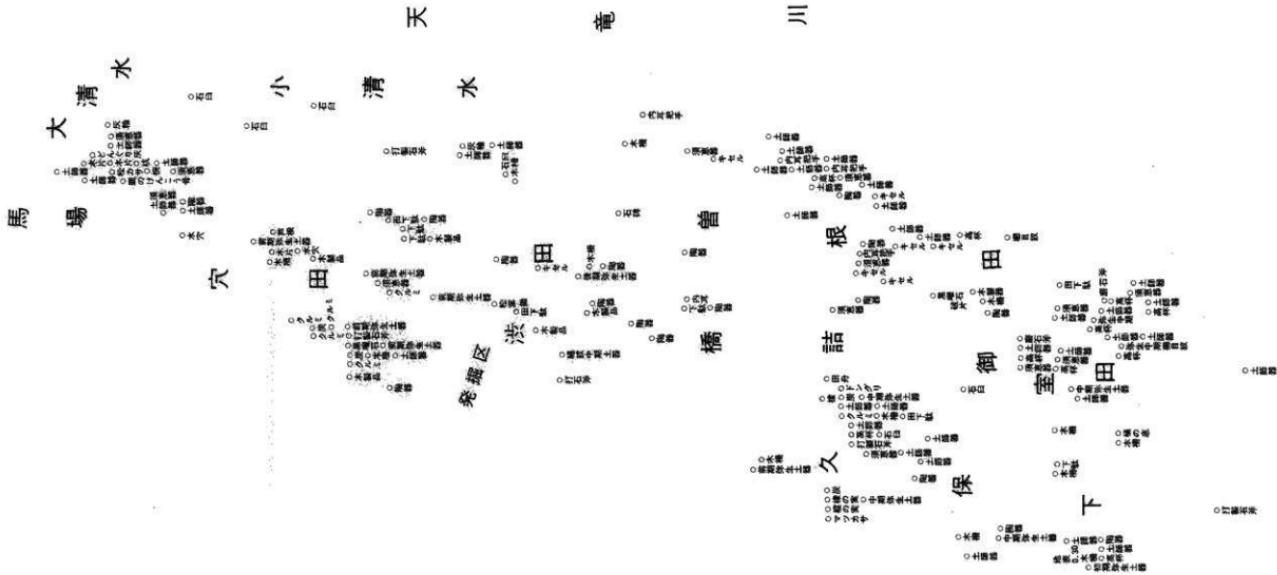
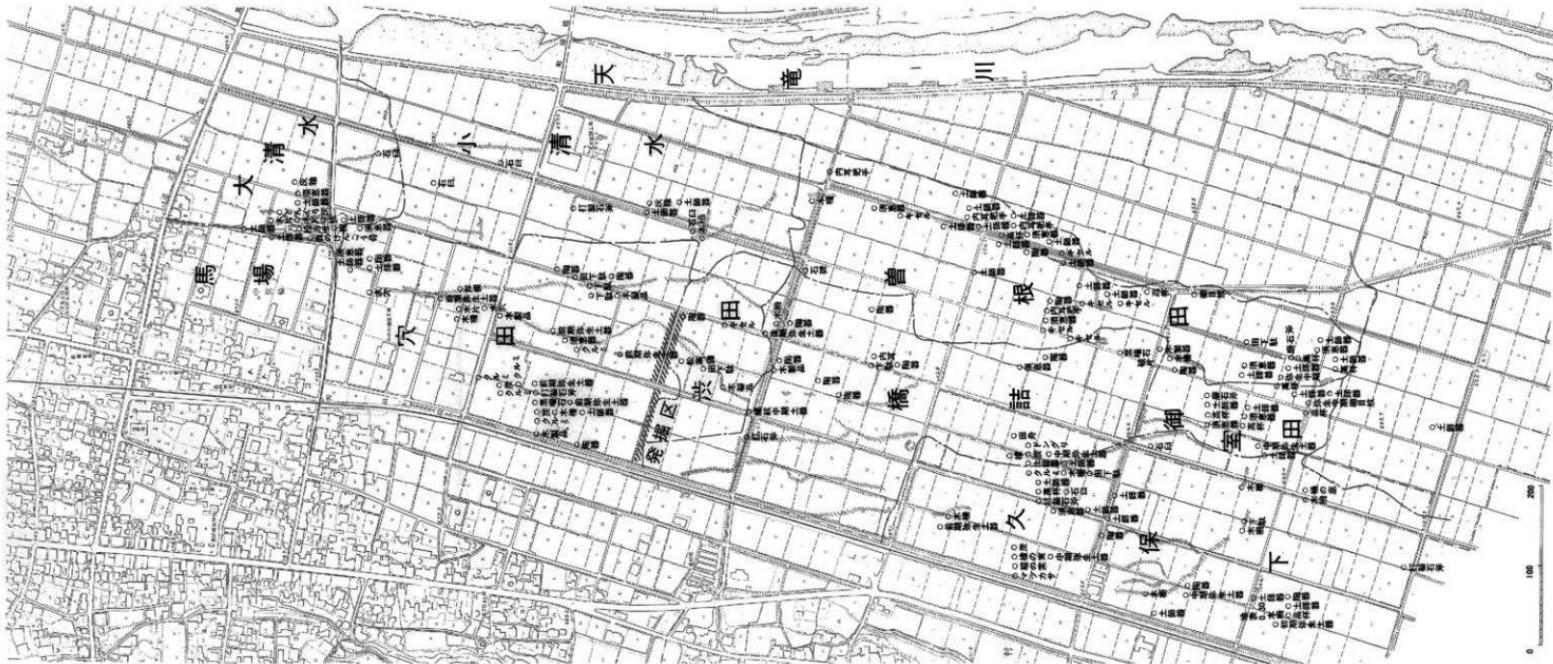
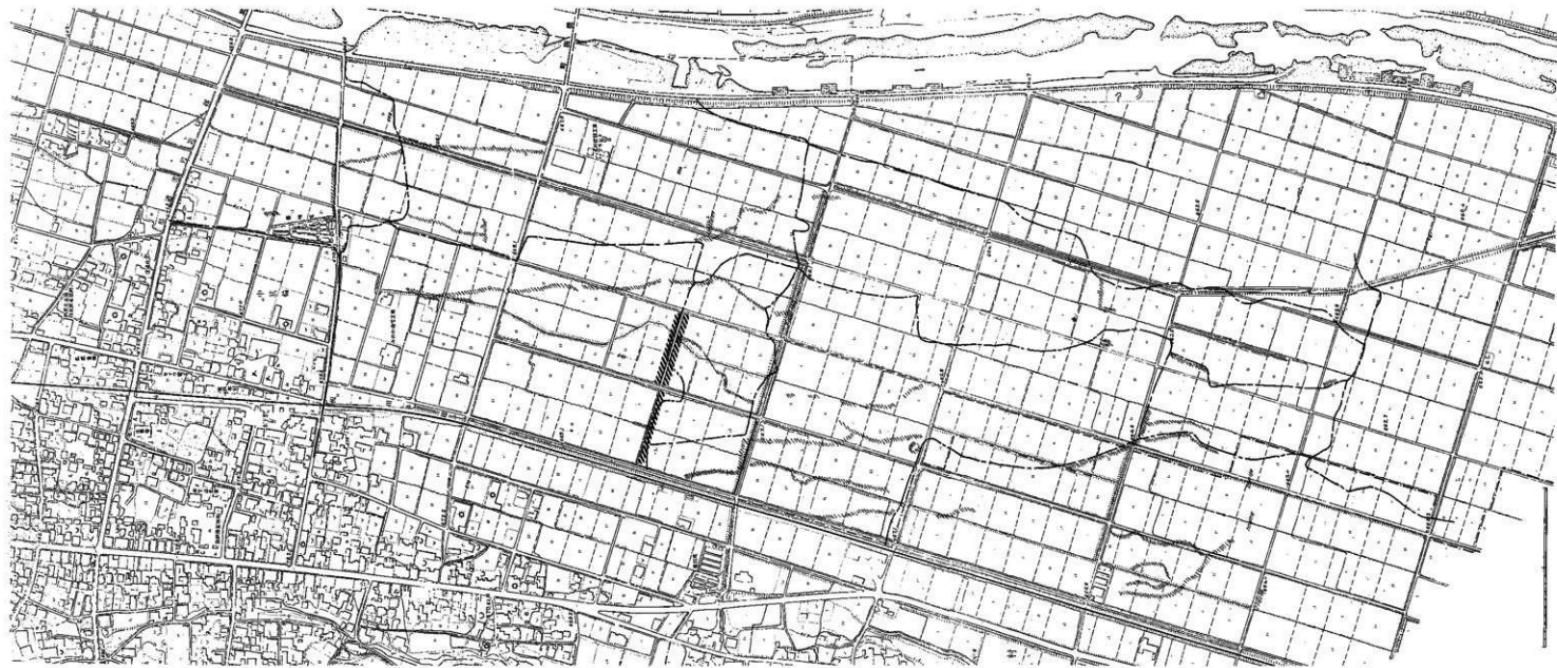


図1-4 美術館施設間の構造と既出建築物十種

図1 国分寺駅周辺の地形と出土遺物

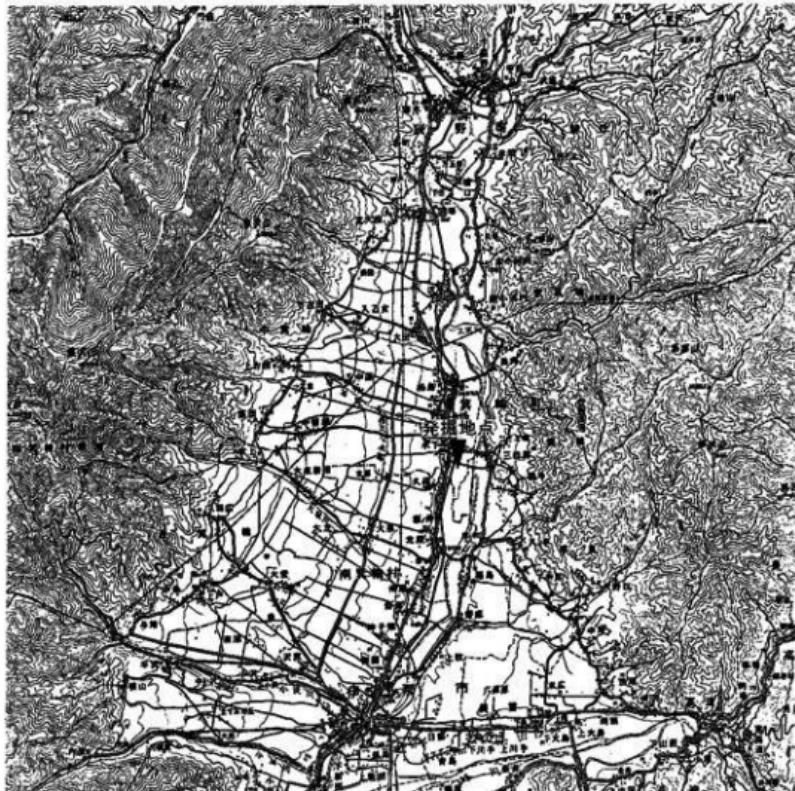




# 第Ⅰ章 遺跡の立地

## 第1節 位置 (第2図)

箕輪遺跡は長野県上伊那郡箕輪町及び南箕輪村にまたがり、天竜川右岸沖積地に位置する大遺跡である。飯田線木下駅がら北殿駅間で東側に見える水田地帯はほとんど遺跡地と見てよい。一口に箕輪遺跡と言われる広い範囲内には、それぞれ小字に分かれている。馬場、苦谷、城安寺御室田、大清水、小清水、穴田、渋田、曾根田、久保下等があり、遺跡の規模は、100ヘクタール余にも及ぶ広範囲なものである。



第2図 位置図

## 第2節 自然環境

箕輪遺跡は箕輪町のはば中央を南に流れる天竜川の西岸から、国道153号線に至る間と、東よりこの天竜川に流入する帶無川より南の100ヘクタールに及ぶ水田地帯である。

西は段丘上に天竜礫層が山麓までゆるやかな傾斜で続きここには耕地整理をしたいわゆる西天竜水田地帯が広がっている。天竜川の東岸は少しの水田をはさんで花崗岩質の山麓となる。ここはすべて天竜川による冲積層である。

箕輪町では昭和42年より国土調査法に基づく土地分類調査を行った。この主目的は、国土の実態を把握して土地利用の可能性を明らかにするためであったが、それによれば殆んどが砂質土壤で下層には砂礫が多いが、天竜川の河川敷であったと言わたところには、葦の根等が、圧縮された状態、又は泥炭に似た状態で埋没されていることを発見している。なを町内全域を4項にまとめてあるが、箕輪遺跡の属する天竜統については、天竜川の氾濫により運搬された土壤で有機質を含んだ細砾が20cm~40cm堆積しているとの報告がある。なおそれを、

第一層 0cm~16cm 黒褐色の砂壤土で膜状の班鉄に比較的富む 密度中 ねばり中

第二層 16cm~20cm 黒黄褐色の埴土で沈積した班鉄を含む 密度密 ねばり中

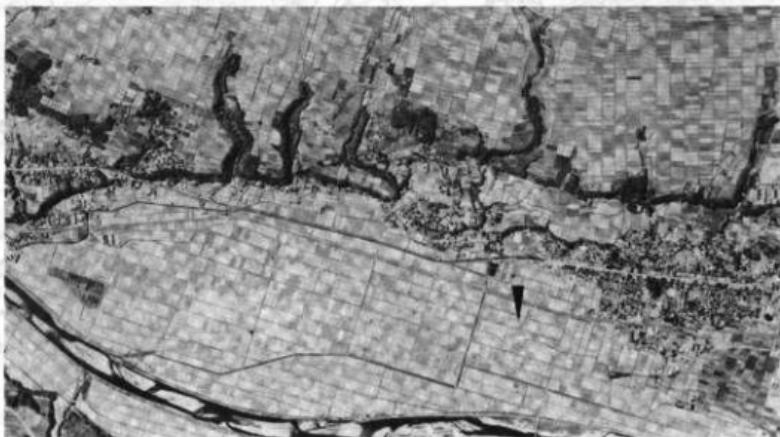
第三層 20cm~47cm 一層と同じ

第四層 47cm以下 黒褐色の埴土で班鉄はなし 密度密 ねばり弱

のようまとめてある。

これは農業振興を目的とした植物に関する土壌調査で、埋蔵文化財の在る深さにまでは達しない。いわば表土に関する報告であるが、箕輪遺跡の現状の自然環境を示すものとして参考になる。

(樋口 彦雄)



第3図 遺跡周辺の地形

### 第3節 歴史的環境

伊都谷の北部に位置する箕輪町は、中央部を天竜川が貫通している。この天竜川に流入する支流により川は大小の曲線を描きながら流下している。本遺跡は天竜川と平行して走る飯田線の木下駅一帯から南箕輪村北殿に亘る総面積100ヘクタール余に及ぶ広範囲の地域である。一帯は木下の北を東流する帝無川がある時期に激しく活動して天竜川東に押したため、段丘下から天竜川との間に現在のような平らな地形が形成されたものと考える。しかも天竜川の形成した右岸の段丘と現流路の中間に横たわる本遺跡は、帝無川とかつて西方から東流した小河川によって扇状地的地形を形成しているため、一般に段丘から水辺にかけて緩傾斜をなし、沼地の土層の中に砂礫層を包含している。このことは遺跡一帯の地層地質をかなり複雑にし、このような自然環境はこの地域に生活の基礎をもった人々に大きく影響を与えたことであろう。又昭和27年前後に実施された土地改良事業以前は、いたるところに湧水池や沼地が存在し、この地域が低湿性であったことを物語っている。なお段丘の付近は標高700m、遺跡西端付近は670mの等高線上にあり、天竜川の沿辺はさらにこれより数メートル低位にある。したがってこの地域一帯がいつ頃から人々の生活可能な場所となっていたかということは、発見された遺物によつて決定されねばならない問題であるとともに、背後の高い段丘地帯と天竜川を前面に控えたこの地帯は、湿性の多い地域であったが、古代人の生活にとっては、その食生活をある程度充しいう条件を備えていたものと解さなくてはならない。ことに水田耕作を生業とする段階に至つては、湿性の多いことがかえって良好な生活範囲となったものといわざるをえない。多くの低湿地遺跡がほとんど単純な一時期の生活に終っているのに対して本遺跡は長期間にわたって遺物を残していることは、その生活期間の永続性を思わせ、その条件にかなっていたことを物語っている。

町内の遺跡を立地する条件により分類すると次の4地区に分けることができる。

第一群 経ヶ岳山塊の山麓付近に立地する遺跡

第二群 天竜川西岸の段丘上に並ぶ遺跡

第三群 天竜川東岸の段丘上及び扇状地に立地する遺跡

第四群 低位段丘(沖積段丘)の遺跡

箕輪遺跡は第四群の遺跡であり、四群そのものが、箕輪遺跡である。前述のごとくこの箕輪遺跡が、第二、第三群の東西段丘上の遺跡と深い関係を持ちながら経過したことは当然考えなければならない。段丘上に居住した人々が低湿地を何かの利用で生活範囲の一部に加えたことを意味するのである。まず第二群における上の林、北城、南城遺跡に見る縄文時代中期から続く遺跡は箕輪遺跡出土の中期、晚期土器類と関係を持つものと考えられ、特に弥生時代に入つてからの低湿地帯を利用した集落は、西側段丘上に位置していたことと思われる。箕輪遺跡を眼下に見る段丘上には、上の林、北城、南城、猿栗と弥生時代の大きな集落跡が調査されてい

る。南箕輪村に入っても同じく天伯遺跡など段丘上に跡切れることなく並んでいる。それらの遺跡のほとんどが弥生時代から引き続いて古墳、奈良、平安時代の集落を残し、段丘上突端部が居住性に富んでいたことを物語っている。これは永く低湿地帯を利用した生活が続いたことの一つの証左としても考えられる。

天竜西側段丘に位置する遺跡として、その壮大な規模を示す松島王墓古墳がある。6世紀後半の築造と推測されるこの大古墳を見る時、これを造ることが可能な絶大な権力と、その経済力は何んであったのだろうか。そうする時、箕輪遺跡一帯から生産される大量の米は、経済的裏付けの最たるものと思うのである。言い換えれば、王墓古墳出現の最も大きな要素とも考えられる。又、ここは中近世に至っても多くの係わりをもつてゐる。その一つとして、藤沢行親が建武年間に箕輪を領して赴任に際し、福与城を選んだのは、その天險もさることながら、眼下に見る穀倉地帯を戦力資源としての理由があったと思われる。田中城を水田地帯の真中に築いたのも同様な考えがそこにあったものと推測される。武田信玄が天文十二年に下伊那出兵の際御射山社に土地を寄進したのはこの地の住民と懷柔してその産米を得る理由からであったろうし、天正十一年木曾義昌が三日町、福与の両神社に土地を寄進したのも武田氏同様の考え方であったと思われる。

箕輪遺跡の東端、天竜川の西岸地域には、慶長十七年(1612)に小笠原氏が木下の上の段付近に陣屋を移すまでは三日町に部落があり、市場があったと伝えられる。現在の字町田城安寺、高坂田、古町等の地名を残しているところである。慶長十七年夏、天竜川大洪水により、三日町村は大半流失し、住民は現在の地に引き移り、村跡はほとんど水田と化した。この遺跡内の水田耕作者は三日町、木下、久保、塩ノ井、般村の人々によってなされている。これ等箕輪遺跡を取り巻く歴史環境は、箕輪の歴史を語る時必ず係わりをもち、これを除いては考えることはできない。箕輪を中心とした一連の歴史こそ箕輪史の集約であろう。

(柴 登巳夫)



- ① 芬輪遺跡群
- ② 北城
- ③ 南城
- ④ 猿樂
- ⑤ 藤山
- ⑥ 中山
- ⑦ 王墓古墳
- ⑧ 中道
- ⑨ 五輪
- ⑩ 並木下
- ⑪ 一の宮
- ⑫ 中曾根北
- ⑬ 向塙外
- ⑭ 山の神
- ⑮ 天伯
- ⑯ 上人塚
- ⑰ 塙外
- ⑱ 内城
- ⑲ 大泉
- ⑳ 宮の上
- ㉑ 上の林
- ㉒ 北塙外
- ㉓ 黒津原
- ㉔ 矢田
- ㉕ 上金
- ㉖ 大原
- ㉗ 澄心寺下
- ㉘ 御射山

第4図 周辺遺跡分布図

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

本地区は、天竜川面の沖積地に所在し、当町から南箕輪村にかかる広大な水田地帯である。昭和26年より行なわれた土地改良事業により区画が整然としている。本地区一帯が一大遺跡地帯として注目されるようになったのは、この地域は、前述のように土地改良事業が行なわれた際、偶発的に各時代の遺物が多量に出土したことによる。特に本県には数少ない低湿地遺跡としてクローズアップされ、学会に注目をあび、極めて重要な遺跡として認められるようになつた。今日まで学問的な調査がなされなかつたため、時代的な位置づけや遺構の性格は推定にとどまっている。

昭和48年より始まった国道バイパス工事が遺跡を通過するため、昭和55年度においては、工事が予想される部分の道路敷の一部を確認調査し土層状況、遺物の包含状況を確認調査した。又、昭和56年度に入り、国道バイパスに直交するように「箕輪美篤線」の工事が計画され、それに伴ないこの道路敷になる範囲の本発掘調査を実施した。これにより何ヶ所かの木構造や木製品遺物が出土した。57年度は前年の第1次本発掘調査に引き続き、第2次本発掘調査が計画され、日本考古学協会々員丸山歎一郎先生を調査団長とする調査団を組織し、7月中旬より発掘調査を実施する運びとなつた。

### 第2節 調査の概要

- 遺跡名 箕輪遺跡
- 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪11537番地他
- 発掘期間 昭和57年7月13日～8月6日
- 調査委託者 伊那建設事務所長
- 調査受託者 箕輪町教育委員会
- 調査会・調査団の構成は下記の通りである。

#### 箕輪町遺跡調査会

- |    |      |                 |
|----|------|-----------------|
| 会長 | 市川脩三 | 箕輪町町誌編纂専門委員     |
| 理事 | 荻原貞利 | 箕輪町教育委員会社会教育指導員 |
| "  | 立花久木 | "               |

理 事 大槻 剛 箕輪町町誌編纂専門委員  
監 事 小林 重男 箕輪町郷土博物館専門委員  
〃 堀口 貞幸 町誌編纂専門委員

調査団 団 長 丸山敏一郎 日本考古学协会会员（伊那弥生ヶ丘高等学校教諭）

担当者 柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館学芸員

主 任 福沢 幸一 長野県考古学会々員

補助調査員 茶城 陽一 筑波大学学生

五味 純一 日本工業大学学生

作業協力者

山内志賀子 泉沢利夫 潤井誠弥 堀内 徹 後藤武雄 唐沢晴人 清水今朝雄  
唐沢忠賢 神子柴喜義 小池保則 中村哲二 唐沢剛俊 萩原すみ子 北沢武志  
金子美智恵 岡 稔雄 小林昌幸 小林マツ江 原 由美子 山口勝博 吉沢早苗  
小林紀史 唐沢浩志 白鳥明美 野沢誠一 小池幸夫 戸田千百 小林淳子  
竹入瑞枝 (順不同 敬称略)

参 与 馬場 寛一 箕輪町教育委員会教育委員長  
原 茂人 " 教育委員長職務代理  
戸田 宗十 教育委員会教育委員  
桑沢 良平 "  
萩原 貞利 箕輪町文化財保護委員会委員長  
藤田 寛人 " 副委員長  
市川 緋三 箕輪町文化財保護審議委員  
矢沢 齊治 "  
堀口 貞幸 "  
小林 健男 "  
小林正之進 "  
山崎 義芳 "  
唐沢 忠孝 "  
上田 晴生 "

○調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

堀口 彰雄 箕輪町教育委員会教育長

坪井 荣寿 " 社会教育課長  
太田 文陳 " 社会教育係長  
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館学芸員  
竹入 洋子 " "

(文責 事務局 柴 登巳夫)

### 第3節 発掘調査日誌

○7月13日 (火) くもり

本日より調査を開始する。

テント設営。資財運搬、調査区域内の草刈り作業を先ず行なう。グリッド設定、昨年の第1次調査時に木柵列が確認されているので、その位置を最初に調査する。調査第一区とする。木柵列出土。鉄片、陶器片少量出土。

○7月14日 (水) くもり

午前中調査第一区を排土し、木柵検出作業を続ける。午後になり機械で第二調査区内も表土の排土を実施。第二調査区からも木柵が検出される。東西に長く続いており、その出土状況は、第一調査区よりバラツキがある。モモの実や陶器片が出士している。

○7月15日 (木) 晴 くもり

第二調査区の作業を拡張し、E列を手掘りで、巾1mのレンチを入れる。その内より木柵出土間隔は広い。全体の出土状況は、巾2m内外にわたって木柵が打ち込まれておらず、特に密な場所はない。第一調査区においても木柵検出の作業を続ける。

○7月16日 (金) くもり

第一、二調査区を平行して進める。第一調査区南寄りに木柵列が東西に長く出土する。それとは平行するようにソダが横になっている。ソダと木柵列との間は跡道ではないかと推測した。頭大の石や、やや太い丸太が横になっている。

○7月20日 (火) くもり

第一調査区の排水作業。第二調査区木柵列検出を続ける。第一調査区の木柵列出土状況を平板実測する。午後文化財保護審議委員6名視察。

○7月21日 (水) くもり

第一調査区平板実測、木柵の検出されていない部分においても調査が必要なため、機械で排土作業。午後になり第二調査区内も機械で排土。その面を整地してから手掘りで作業を実施。ももの実や陶器片少量出土する。作業を進めながらの排水作業は連日大変である。



○7月22日 (木) くもり

第一調査区木柵出土状況精査。午後写真撮影。第二調査区の北側を巾5m程度機械により排土、そこを整地しながら、遺物、遺構の検出作業を実施。

昼に筑波大学の岩崎先生が現地見学。明日からは第一調査区の細部調査に入ることにする。



○7月23日 (金) 晴 くもり

第一調査区A地点の断面図作成。機械により第二調査区東寄りを排土作業。その後を手振りで整地作業を行なう。(町民新聞取材)

○7月24日 (土) くもり

第一調査区A地点写真撮影、B地点のカットに入る。道路と予想される全面をレベル測量。第二調査区木柵列検出作業を引き続き行なっている。  
(南箕輪村誌編纂室の原、唐沢先生現地見学)

○7月28日 (水) くもり

第一調査区B地点断面図作成。C地点カットを開始、第二調査区のA、B地点の木柵出土状況を平板実測する。断面図を添える。

午後、上伊那郡下教育委員50名現地見学。

○7月30日 (金) くもり

毎朝のことながら一夜のうちに調査内が地下水でいっぱいになっている。これの排水は大変な労働である。低湿地遺跡調査ではしかたのないことであるが。第二調査区全体の木柵検出状況を平板実測。第二区F列の排土作業。第一調査区C地点断面図実測。

○7月31日 (土) くもり

第一調査区道路カット面の実測、第二調査区は昨日の続きを行なう。一部木柵を振り上げる作業。第二調査区の木柵は北側が密で、他はバラバラである。木柵は南に傾いている。二区を写真撮影。72、73グリッド内は木柵は少ない。

○8月4日 (木) 晴

第二調査区B地点地層断面図作成。61、62-Fグリッド内に東西に横木が検出される。第二調査区A地点木柵列断面図作成、上記グリッド中には他と異なるかなり大きな木柵が打ち込まれていると思われる。

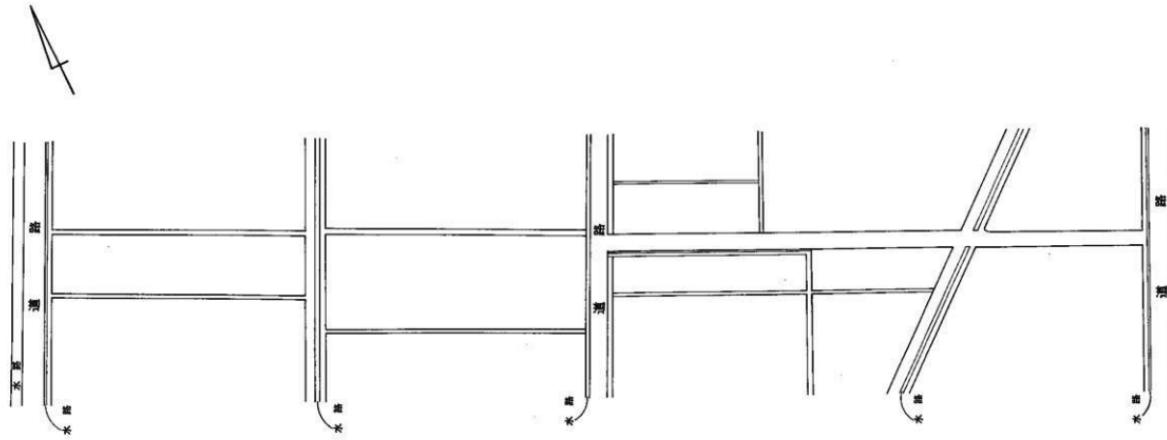
○8月5日 (金) くもり

第二調査区61、62-Fグリッド内の木柵列実測、写真撮影、61~64-Eの木製遺物取り上げ、大形木柵の取り上げ。テントの片付け。

○8月6日 (土) 晴

木柵の取り上げ作業。運搬。61~63-E、Fグリッド内より土師器出土。資材の片付け、本日で現場作業を終了。





第5图 莫哈达斯第II次调查全体图



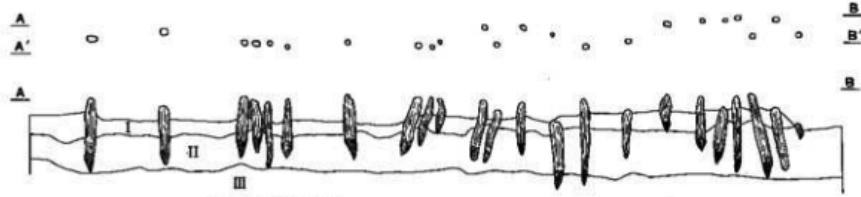
第6図 第1調査区出土木構列実測図

## 第III章 遺構と遺物

### 第1節 遺構 (1) 第1調査区 (第6、7図)

本調査区は、昭和56年度の第1次調査に統くものであるため、その時のT4区位置の南に平行して設けた。グリッドは南北にB～E、東西に77～86までの40グリッドとした。第1次調査時において、T4区東端に木柵列が検出されていたため、まずこの続きを検出することから始めた。78-D、Eグリッドにおいて、第I層の耕土層15cmほどを耕土すると木柵の頭が検出された。この部分の木柵出土状況については第7図A地点出土状況図に示したとおりであるが、第1次調査の木柵出土状況より多くなっている。この列を南に掘り進めたところ東西に長く延びる木柵列に当った。この列は調査範囲内において16mを測った。当然西に統いて延長されている。この範囲は特に密集して杭が打ち込まれ、2mの内に90～100本に及んだ。この東西の木柵列と平行して、粗柔を並べた状況が検出された。これは木柵列の南側1.4mほどの間隔を示している。その間には所々に石が置かれたり、木柵よりやや太めな丸太が置かれたりしている。この状況から、この範囲は道跡であったと考えられ、土の状況も小石が混入しており明らかに道路と推測できる。湿地における道路を少しでも使いよくするために努力した様子を伺うことができる。このような状況の検出は今回が初めてであり、第2調査区においては見られなかった。

次に木柵がT字状に交わる部分に、約40cmの間木柵が打ち込まれていない所がある。82-Bグリッド内においても同様な所が発見された。ここは水田の水の出入口であろうと推測された。打ち込まれた杭は40～50cmの長さが最も多いため、頭部が腐蝕して短くなっているため、当時ににおいては多少長かったと考える。杭は南に傾斜しているものが多く見られるが、これは水田側から力が加えられたためであろうか。又木柵は一時期に打ち込まれたものではなく、長期間補強されながら、打ち加えられたものであろう。それは杭そのものの腐蝕状況の違いや、打ち込まれ方などを観察することによって知ることができる。この地点における耕作土層は第II層であり、粘性の強い黒土層である。石は全く見られず、III層上面で小石がほぼ同レベルで現われる。ここが当時の水田の地場である。木柵列や道路などの検出により、水田の規模や、形などの状況がある程度確認されることを期待しながら調査を進めたが、それまでには至らなかった。本調査区において木柵列状況、あぜ、道路、水の出入口等の状況を知ることができ、第II次調査の大きな収穫であった。木柵の打ち込まれている状況及び土層については第7図に示すごとくである。木柵はサワラ材が最も多く、木目に添って割り、先端を数回削り尖らせている。木柵その物については後述する。



第1調査区A地点

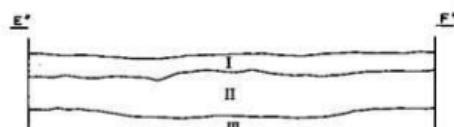


第1調査区B地点



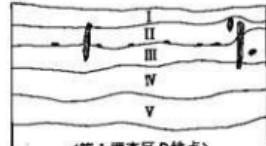
第1調査区A地点

$S = 1/10$   
I層(細砂層) 黒土を含む  
II層(黒土)  
III層(砂利層)



第1調査区C地点

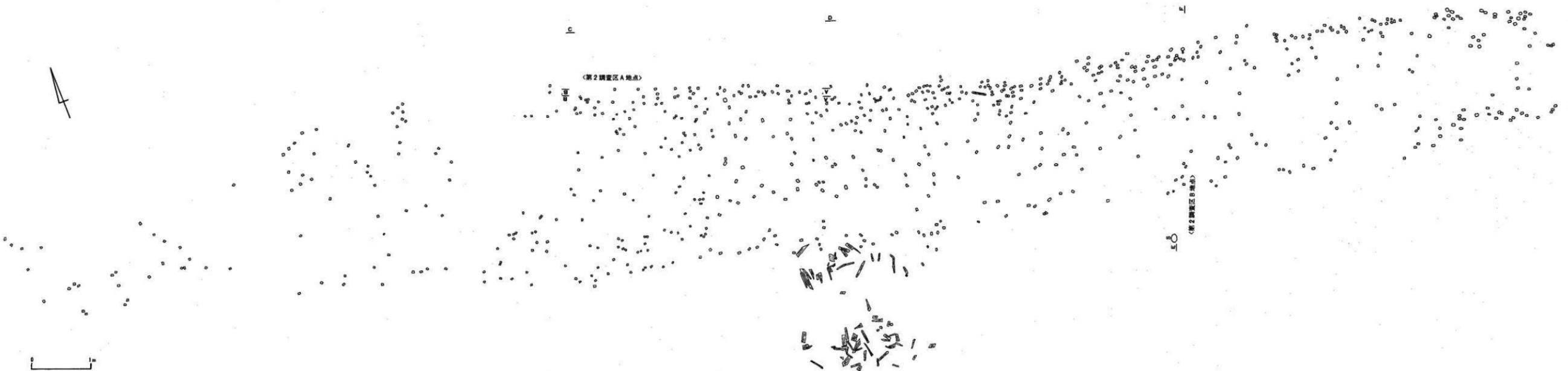
第1調査区C地点  
 $S = 1/10$   
I層(砂層)  
II層(耕作土) 木標現存當時  
III層(礫層) 細7cm平均



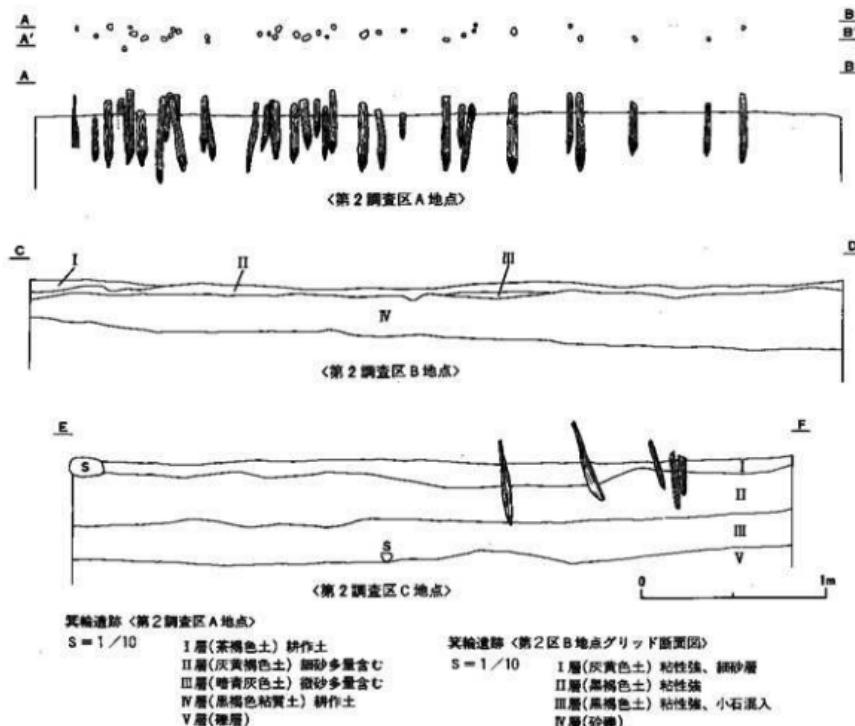
第1調査区D地点

第1調査区D地点 排水口断面  
 $S = 1/10$   
I層(黒色土) 細かい砂粒混入  
II層(黒色土) 粘性強、木片混入  
III層( ) 粘性強  
IV層(礁層) かなり大きな礁混入  
V層( ) 小礁が多く間に砂粒混入

第7図 第1調査区A～D地点木標出土状況実測図



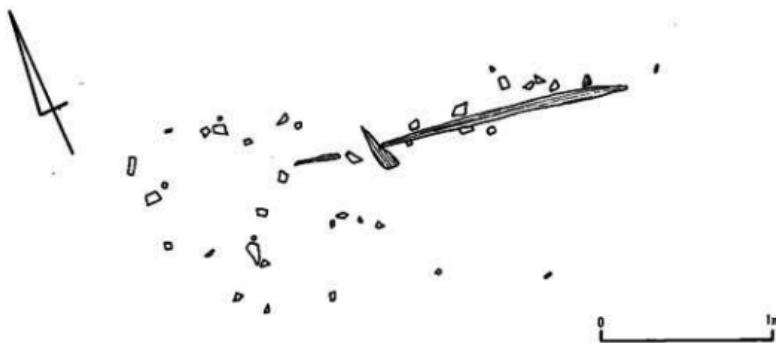
第8図 第2調査区出土木構列実測図



第9図 第2調査区A～C地点木柵出土状況実測図

## (2) 第2調査区 (第8、9図)

第1調査区の東側に統一して設定した。グリッドは南北にA～G、東西に62～76列まで105グリッドとした。第1調査区において木柵列の検出がなされており、列の延長方向も予想されていたため、それに添う方向で設定を行なった。第1調査区東端の78-D、Eグリッドに南北に木柵列が検出され、これが水田の境を示すものと考えられており、この地点から第2調査区内に、巾2.5～3mの間に、列状に東に向って杭が打ち込まれている状況が検出された。この状況は第1調査区のそれといいくつかの相違点を見ることができる。(第6図、8図参照) 第1調査区においては木柵列はほぼ直線で、あぜに相当する部分の約50cm間にかなり密に打ち込まれているのに比べ、第2調査区はあぜと道路巾の間にバラツキながら打ち込まれている。あぜ際については他よりも密になり、かなり曲線を呈している。又、道路の強化方法についても第1調査区は粗朶や丸太、石を配しているのに対し、第2調査区では杭のみである。このことは第1調

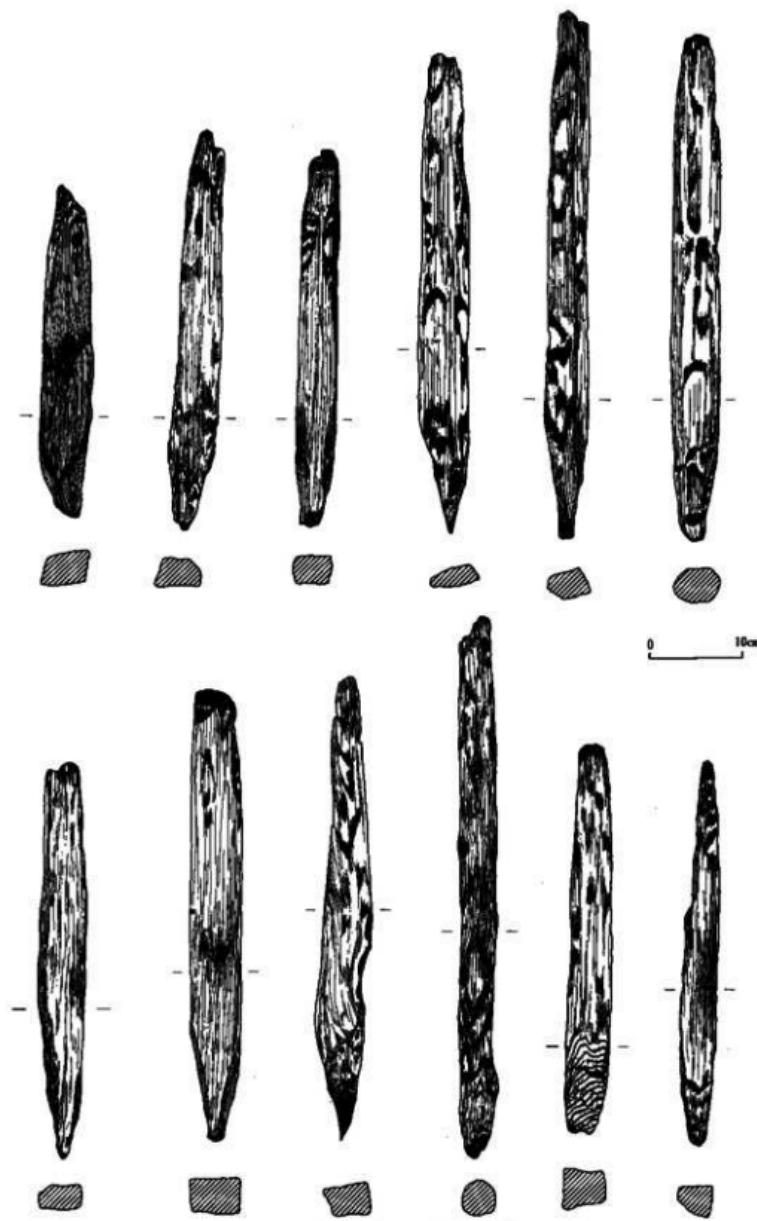


第10図 第2調査区F-61、62グリッド出土木柵列実測図

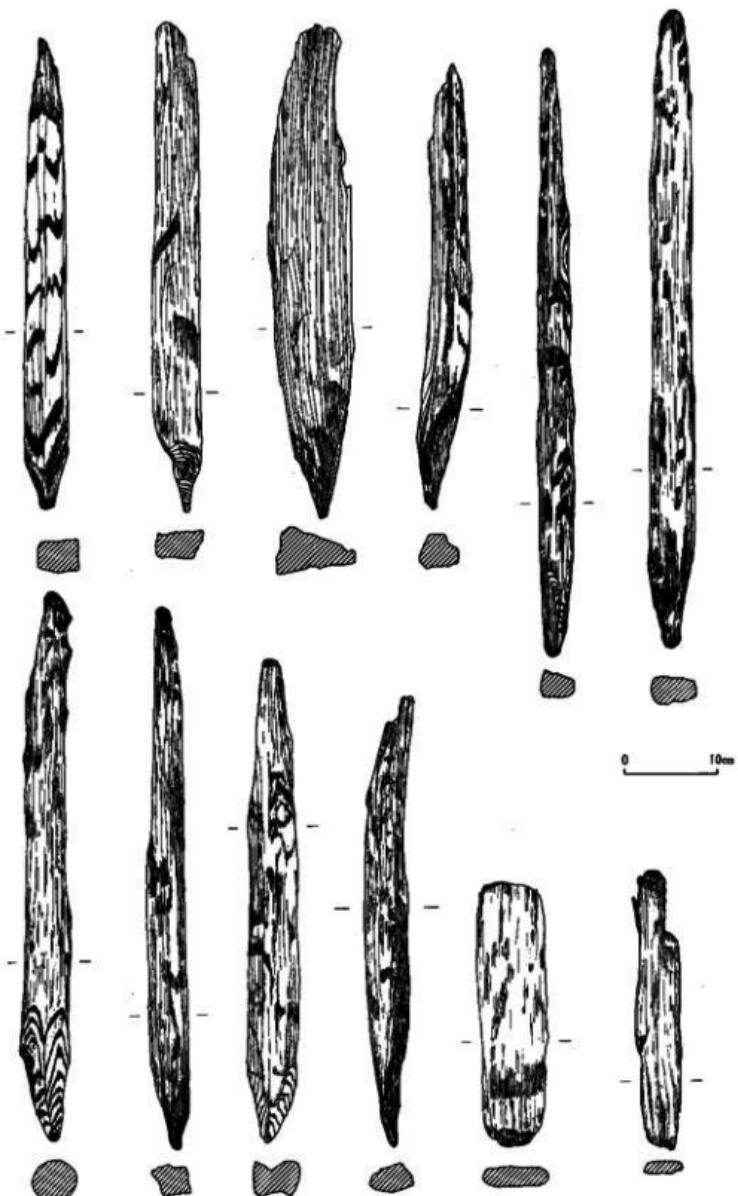
査区の水田と、第2調査区の水田の開田時期に差があるのではないかと考えた。出土遺物における差を見るほどではないが、あぜ、道路状況などを検討する時、第1調査区における構築方法は進歩が感じられる。一ヶ所だけの状況で、開田方向や、道路事情について決め付けることはできないが、本調査区におけるこの部分の相違点は今回の調査に一つの問題を投げかけた。第2調査区における杭そのものは第1調査区出土のそれと変わらないが、丸太のまま使用しているものが含まれている。あぜ際に打ち込まれている密度においては、第2調査区の方が低い。杭は南に傾くものが多く見られる。又部分的に規則性を持って列状に打ち込まれた所も見られ、あぜや、道路事情の軟弱度合を見ながら漸次杭を補ったものと考える。木柵の打ち込まれた様子については第9図に示すとおりであるが、第III層上面まで打ち込まれているものが多い。

### (3) F-61、62グリッド出土木柵列について（第10図）

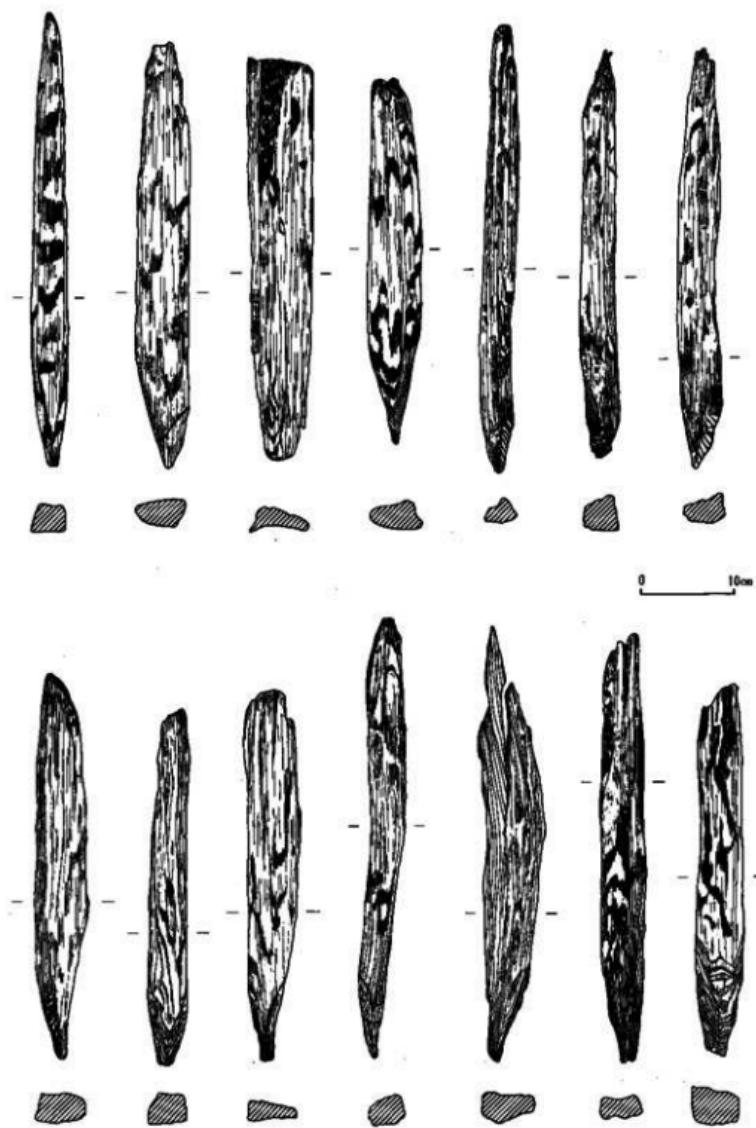
本遺構は第2調査区の東端に位置するF-61、62グリッドにおいて検出された。本調査における木柵は第I層の耕作土層下から頭が検出されて発見されているが、この遺構はそれよりやや深くなっている。東西に約3mだけで他に続いてはいない。他の木柵列状況と相違している点として、材がナラであり、大きな粗材を割り、長さ太さも普通の杭の2~3倍を呈している。なかには部分的に杭の表面を焼き腐蝕を防いでいるものが見られる。打ち込まれている杭のほぼ中央に2m程の横材を配していることである。この状況から、この部分が他に比べよほど軟弱で、強化しなければならなかったことを伺うことができる。



第11図 第I調査区出土木柵実測図



第12図 第2調査区出土木柵実測図



第13図 第2調査区出土遺物実測図



0 10cm



0 20cm

第14図 第2調査区出土木柵実測図



第15図 第2調査区出土木櫛実測図

第1表 出土木櫛要目一覧表

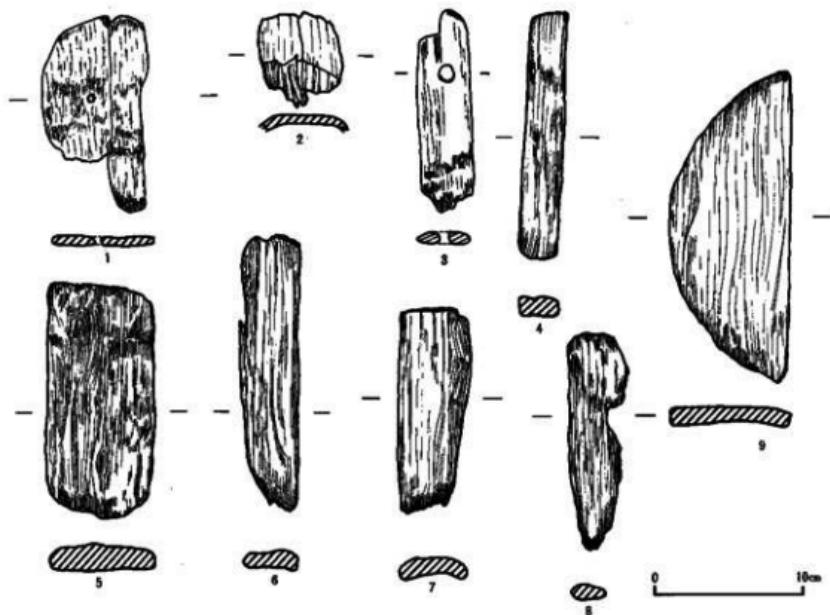
長さcm	角材(本)	丸材(本)	パーセント	最大径cm	角材(本)	丸材(本)	パーセント
20cm以下	184	4	11.0	3cm以下	300	20	10.0
20~25	269	13	17.0	3~4	541	24	33.5
25~30	294	8	18.0	4~5	523	15	32.0
30~35	308	9	19.0	5~6	202	1	12.0
35~40	215	8	12.5	6~7	46	1	3.0
40~45	170	11	11.0	7~8	9	0	0.5
45~50	103	1	6.0	8~9	2	0	0.001
50~55	40	1	2.5	9~10	2	0	0.001
55~60	21	4	1.5	10cm以上	0	0	0.0
60cm以上	21	2	1.5	計	1625	61	100
計	1625	61	100				

## 第2節 遺物

### (1) 木櫛杭 (第11~15図)

本調査における木櫛杭の出土数は1,686本である。出土状況については前述したような状況であるが、そのほとんどが、水田のあぜと道路敷を強化するために使用されたものである。それは現水田の耕作土下15cm前後の所に頭を出している。図に示すように杭の上半分は腐蝕により細くなり、頭部は当時の形を留めるものは少ない。平均5~10cmは短くなっていると考えられる。出土木櫛杭1,686本すべてを、全長と最大径につき角材と丸材別に計測して表にした。

(第1表参照) 長さにおいては30cm前後の杭が最も多いが、当時は40cm程度の長さを有していたものと推測する。杭の長さは打ち込まれる場所の軟弱度合に大きく影響されるることはいうまでもないが、あぜ際に打ち込まれているものは、ほとんど30cm程度に統一されていた。角材はほとんどがサワラ材で、目の通った良い材を使っている。丸材はナラ、クリなどの雜木が多く、共に先端を鋭利な刃物で5~10回ほどで尖らせている。杭の太さは最大径が4cm前後のものが半数近くを占め、ほとんど一定の大きさに削られている。又杭の中には部分的に焼いたもののが見られるが、これは腐蝕を防ぐための考えから行なったものであろう。これらの木櫛杭は水路、あぜ、道路敷等あらゆる所に使われている。湿地帯における開田には欠くことのできないものであったといえる。箕輪遺跡全体に使われている木櫛杭は莫大な量になる。これは近くに原木が豊富であったことと、使用効果が大であったことを物語るものである。木杭はごく最近まで全く同じ方法で使用されており、古代人のすばらしい知恵を感じるばかりである。

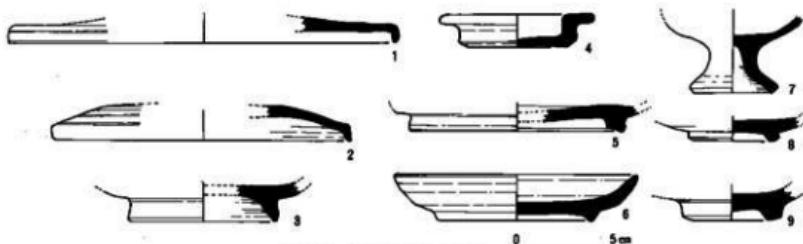


第16図 出土木製品実測図

## (2) 出土木製品

本遺跡における木製品の出土は、人形を初めとしてその種類、量共に多岐に及んでいる。それらの多くは昭和28年当時の土地改良工事を実施する段階で確認されたものであった。それ等について、56年度の調査報告書に示した通りである。いづれの発掘調査においても出土遺物の内容には特に興味を強くするが、本発掘における木製品遺物については、木柵杭を除いては全く見るべき物はなかった。その中における一部を第16図に示した。

1は厚さ4mmほどの板片で、一面には三ヶ所塗彩の痕跡があり、中央に径3mmの孔があけられている。他面は焼けて炭化している。3は第2調査区F-61グリッドからの出土で、上部は半分ほど切り込みがなされ、3.5cm巾の板の中央に径7mmの孔があけられている。これも使途不明である。8は板片の一部に半円状の抉り込みを付けたものであるが小片で使途目的は不明である。9は桶底の一部と思われるもので、桶底と推測すると直径22cmの大きさである。板厚は12mmで正目板を使用している。



第17図 出土陶磁器実測図

### 第3節 出土陶磁器（第17図）

出土陶器片のうち実測可能なもの9点を第17図とした。1は第2調査区62-Fグリッド出土の須恵器蓋である。径が20cmとかなり大きなものである。表には自然釉が流れ、天井部は低く平らに近い状態になっている。端部はほぼ直に立ち上がり5cmの高さを有している。一部分の破片であるため完全に器形を復元することはできないが、時期は8世紀前後と推定される。

2も同じ須恵器の蓋で、1と似ているが、端部の立ち上がりが「ハ」の字状にやや外側に開いている。自然釉が流れ蓋の径は15cm余である。3は灰釉の高台付き碗の底部である。猿投の黒筆釉と思われ、時期は11世紀中ごろのものである。4は第2調査区66-Dグリッド出土でII層上面からの深さ40cmに位置している。5は第2調査区61-FグリッドでII層上面からの深さは70cmと深く同一個体が3片になって出土した。杯身の底部で土器の芯まで青灰色に焼かれている。高台は外側にやや開く「ハ」の字状を呈し、巾が8mmと厚く、しっかりとした形に削り出されている。8世紀と思われる。6は第2調査区66-Dグリッド出土で、高台付き皿である。志野系で時期は江戸時代である。7は第2調査区59-Eグリッド出土、江戸時代の瀬戸灰釉で脚付き猪口状の器形を呈している。仏器と考えられる。8は江戸時代の瀬戸筒茶碗の底部である。9は中世末ころの天目茶碗の底部である。

実測図及び図版に示すように出土陶器類は小片が多く、器形も判断し難い。これは出土遺物が当時の道路面や耕作土層中に多く含まれていたことにより、長い年月の間に細片になってしまったと考えられる。第17図5に示した須恵器底部は耕土下70cmの礫層下に位置していた。この時期に礫層の堆積があったことを物語るものである。これ以外の出土陶器類は時代別の層序には関係なく、全く混同している。そのため第I層の現耕作土中と第II層の当時からの耕作土中からの出土したものは、長期間の耕作や移動により遺物は上下している。そのため出土状況による層序的時代区分作業は難しい。量的には江戸期の陶器類が最も多く、器種も多種多様である。実測のできない小片については図版21~25に示しそれぞれに説明を加えた。今後共に本遺跡の調査は続くものと考えられるが、出土陶器と木製品遺物の出土状況などについて注意深く観察しなければならない。なお出土陶磁器については友野良一氏よりご教示いただいた。

## 第IV章 まとめ

箕輪遺跡の今回の発掘調査は、昭和55年度から実施されている国道改良事業に伴う事前の調査の第3年次にあたるものである。道路予定地という限られた範囲の調査であり、およそ100haに及ぶ遺跡の全容を把握するにはとうてい至らないが、本年度の調査においてもいくつかの新知見を得ることができた。なかでも、密集して杭が打ち込まれた木柵列とこの木柵列に併行して粗朶を並べ、ところどころに石が置かれた巾1.4mほどの道路跡が検出されたことは、発掘調査によっては今回がはじめてであり注目されるところである。

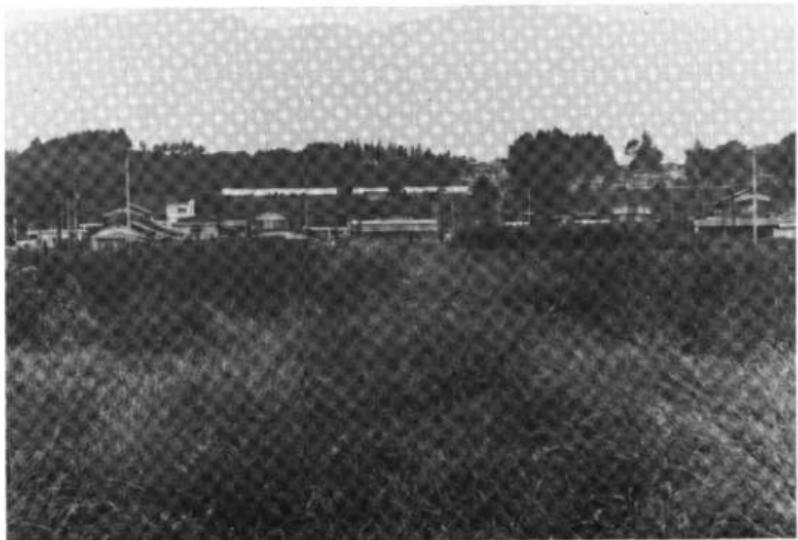
調査の状況については本文にゆずるが、発見の動機、調査の経過、既出遺物等については、箕輪町教育委員会「箕輪遺跡」(昭和56年)、同「箕輪遺跡—調査第Ⅱ集—」(昭和57年)を参照されたい。

最後に、限られた期間の中で、泥と水との闘いといった悪条件のもとで発掘調査を行なってくださった調査団諸氏、上の林遺跡、天王塚古墳の発掘調査、報告書の作成ときびしい状況のなかで作業をすすめてくれた調査員各氏の労が大であること、箕輪町、箕輪町教育委員会、箕輪町郷土博物館のみなさま方が、調査に全面的に御協力くださったことをここに記し、厚くお礼申しあげます。

(丸山 敏一郎)



# 図 版



調査前近景



調査前近景



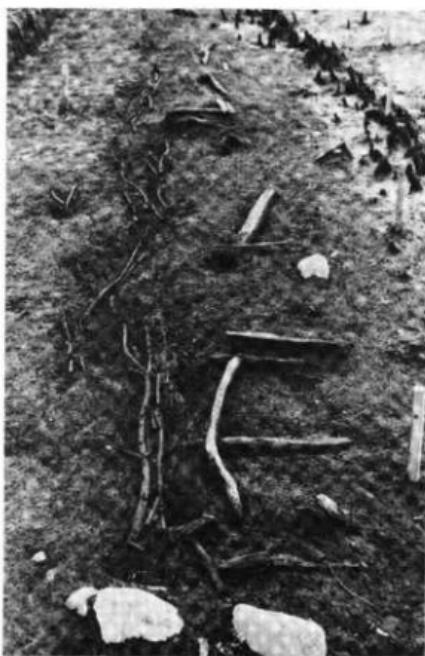
第1調査区全景



第2調査区全景



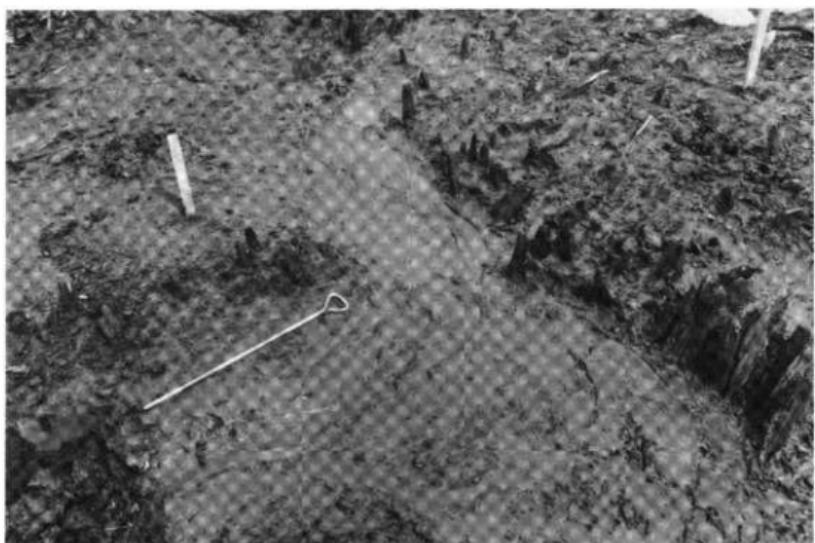
木桿杭狀況



道路狀況



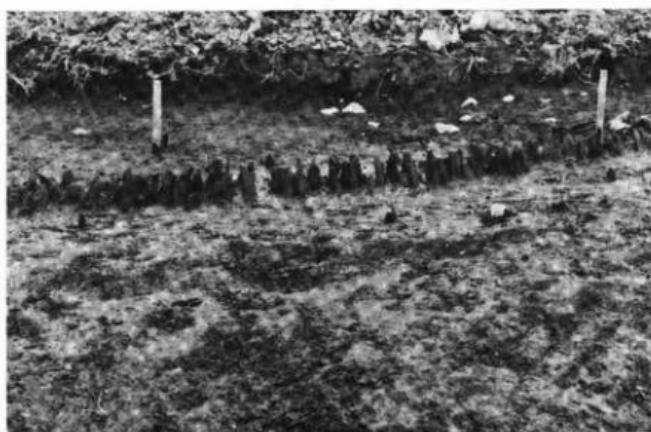
第1区排水口木樁狀況



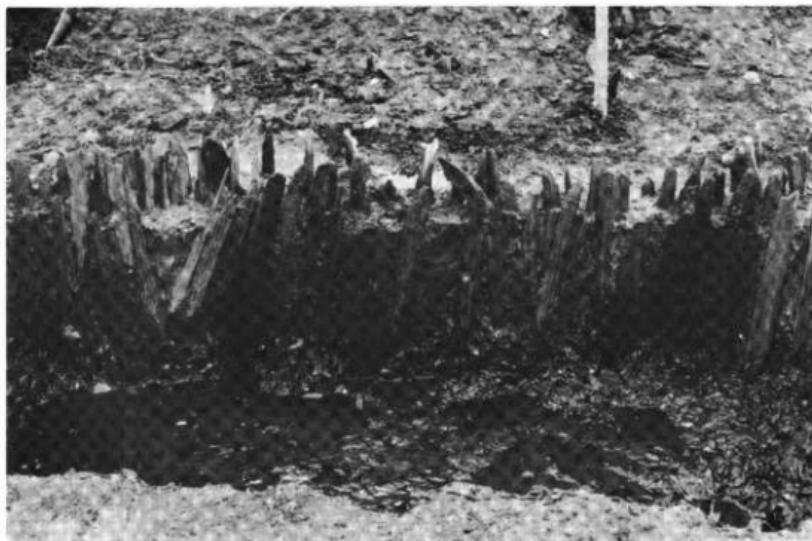
第1区排水口木樁狀況



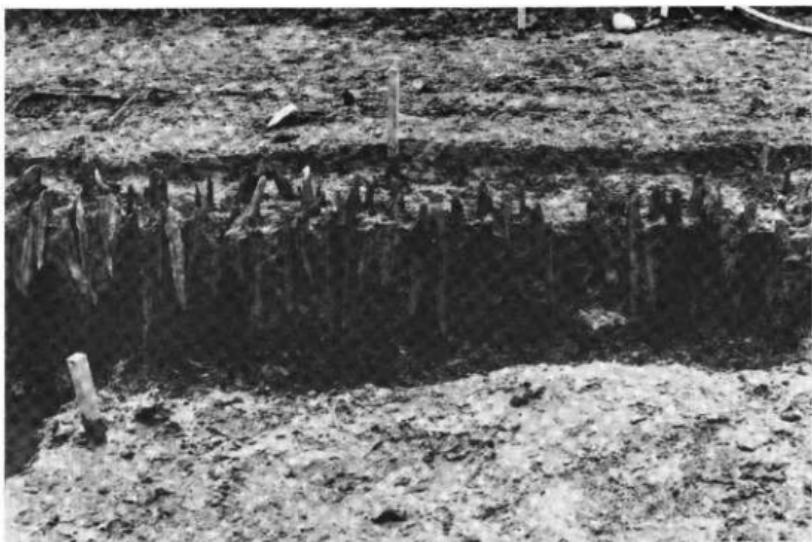
第1調査区木柵出土状況



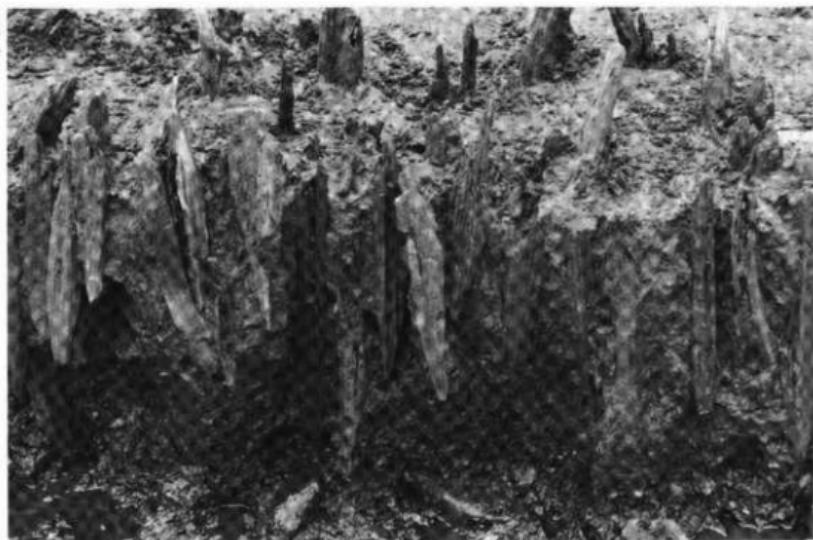
第1調査区木柵出土状況



木柵打ち込み状況



木柵打ち込み状況



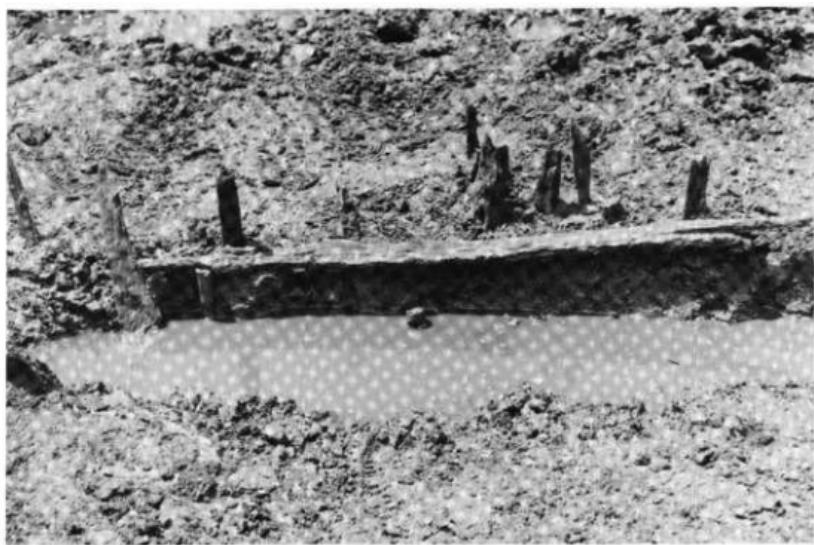
木樁打ち込み状況



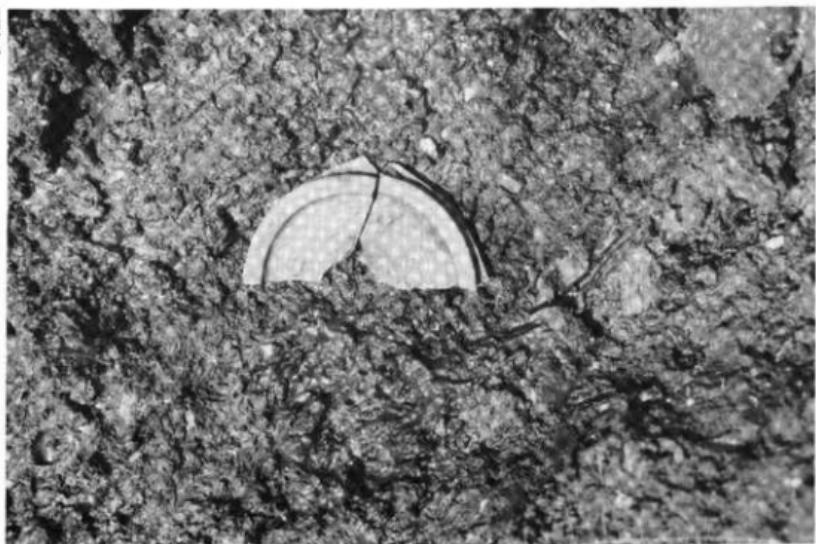
木樁打ち込み状況



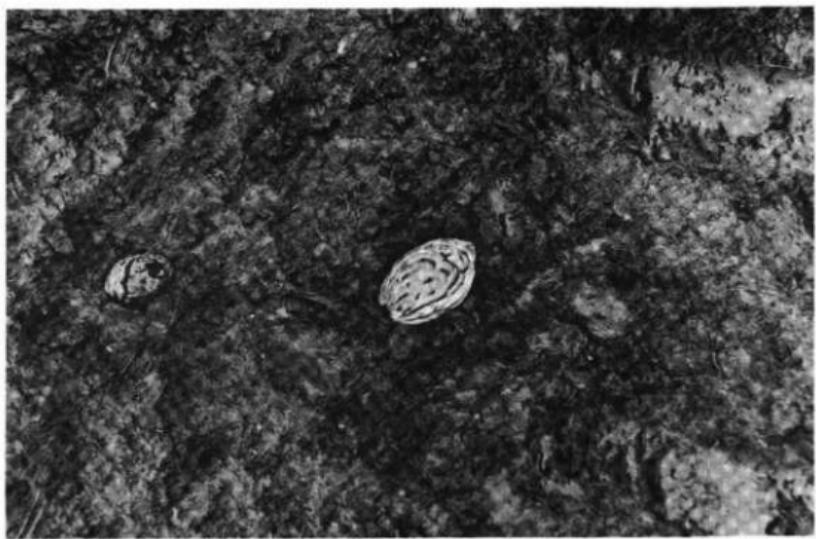
第2調査区木標状況



第2調査区61-Fグリッド木標状況



須恵器出土状況



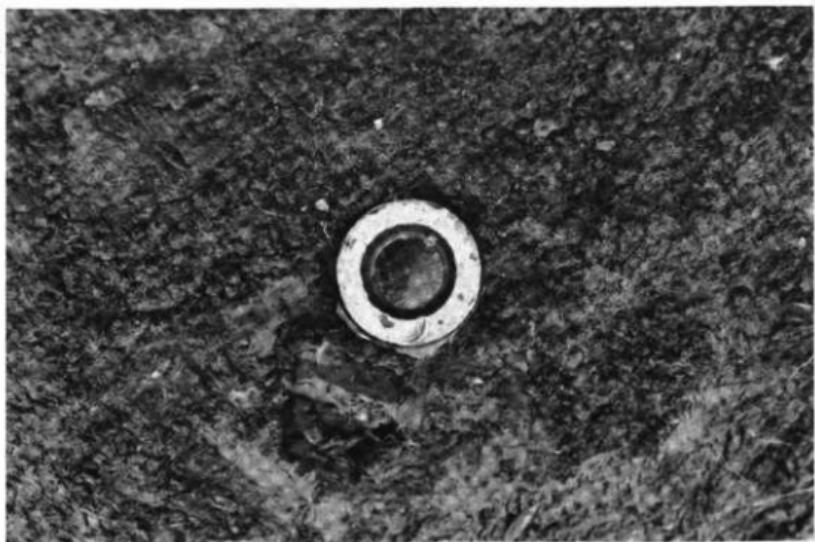
桃の実出土状況



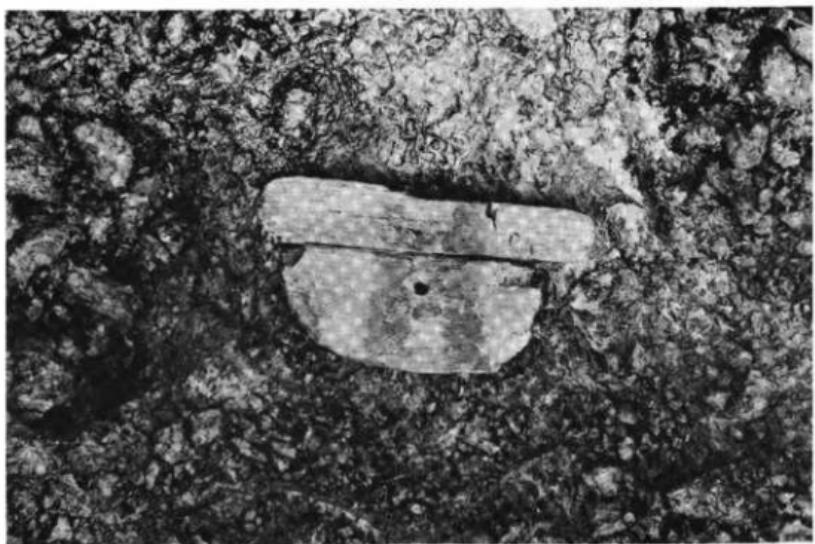
陶器出土狀況



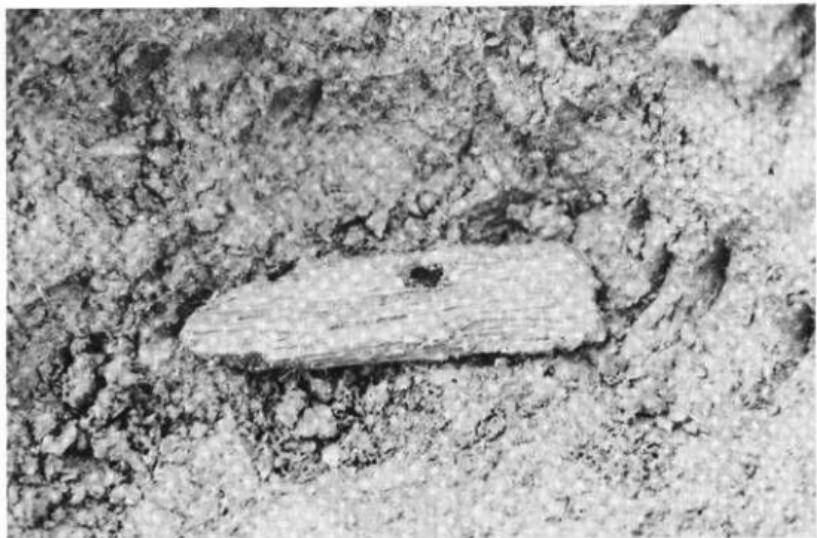
陶器出土狀況



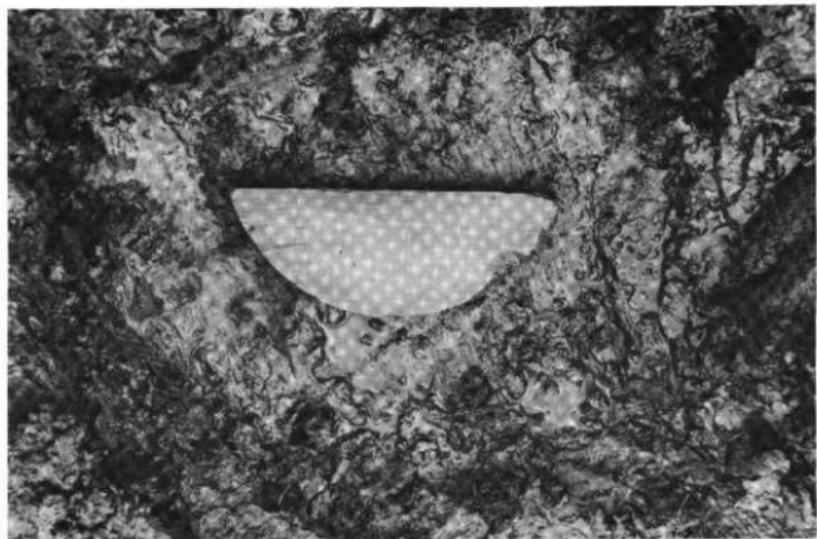
陶器出土状況



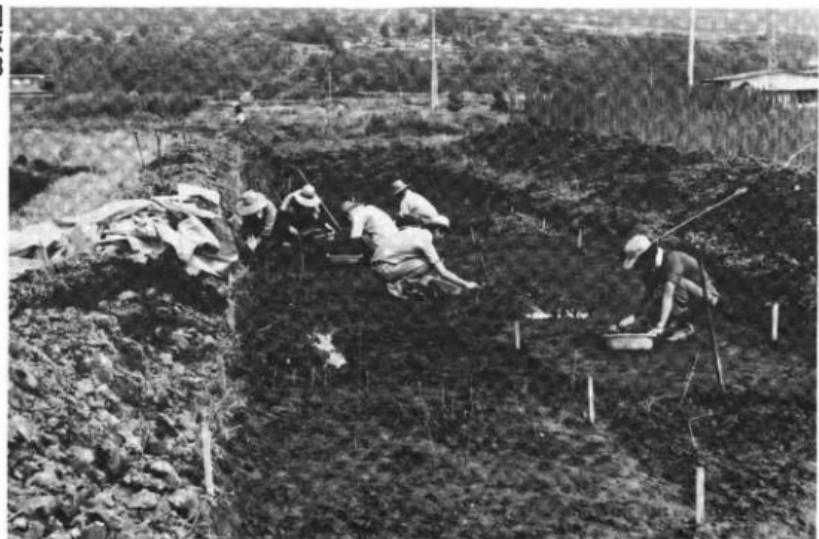
木製品出土状況



木製品出土状況



木製品出土状況



第1調査区作業状況



第1調査区作業風景



調査風景



調査風景



第1区A地点調査状況



調査風景



木製品洗い



木製品洗い



調査参加者



調査参加者



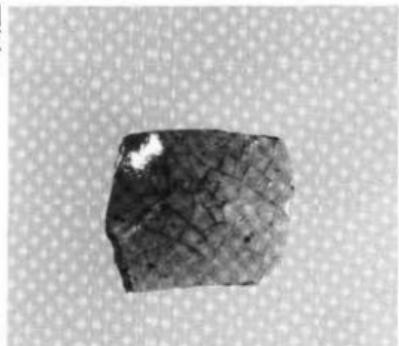
出土木柾杭



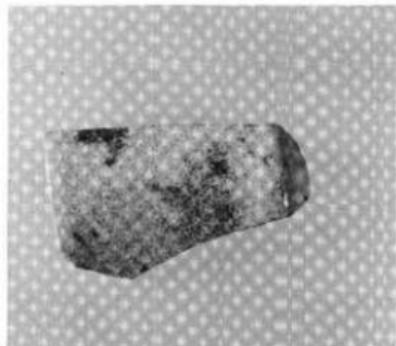
出土木柵杭



木 製 品



美濃系灰軸、江戸時代



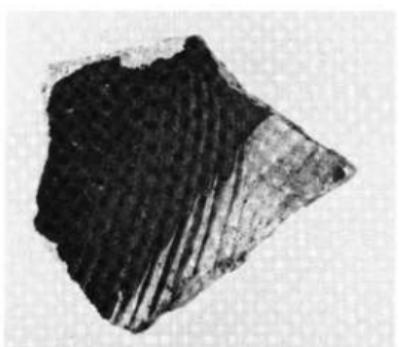
染付茶磁、明治時代



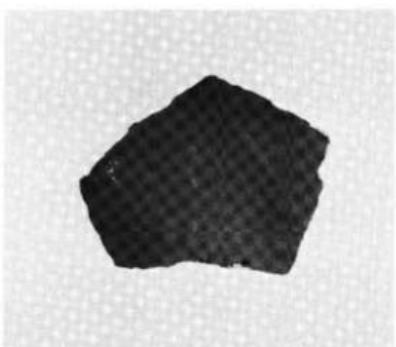
青磁竈泉、南北朝時代



室町時代



瀬戸擂鉢鉄軸、室町時代



鉄軸、江戸時代